

女子装束の縫製技術と着装

—唐衣・裳—

Sewing and Dressing for Court Costume of Women

—Karaginu・Mo—

阿部 栄子¹, 中澤 奈々絵², 加藤 加苗³
Eiko Abe¹, Nanae Nakazawa², and Kanae Kato³

¹大妻女子大学家政学部被服学科, ²(元)佐藤栄学園 栄東中学高等学校教諭, ³東京都立八丈高等学校教諭

キーワード: 女子装束, 裁縫, 着装, 裳

Key words: Costume of Women, Sewing, Dressing, Mo

1. 研究目的

伝統衣裳や時代衣裳について論じる時, 私たちの脳裏にはまず平安時代の代表的な装束として, 束帯(そくたい)と十二単(唐衣裳, 女房装束, 桂形式)が浮かんでくる. このような日本の装束は, 1200年もの長きにわたって伝統を受け継いできた世界でも類のないファッション文化を有している. 今日では, このような装束の着用姿を目にすることができるのは, ごく限られた場面だけである. しかし, 我が国では幸いにも, 2019年に大嘗祭をはじめとした一連の新天皇即位行事が行われた. この行事を通して, 改めて長きにわたって伝統を受け継いできた世界でも例のない日本の衣服のファッション画像を目にし, 誰もがその衣裳に魅了された. 数年を経た今でもあの華麗で雅な姿は, 脳裏に焼きついている.

現在, 一部で受け継がれているこの伝統衣裳の形態, その縫製の合理的な一面には, 被服学はもとより, 被服構成学, なかでも和服裁縫の原点を改めて考えさせられた. これを機会に, 脈々と受け継がれている装束(有職織物による装束類)を取り上げ, 現存装束の調査と記録を着実にを行い, 本学の学生教育資料を作成する必要があることを痛感し, 記録を行った.

本研究では, 現存する女子装束, 特に華麗な衣裳を形成する装束の最上衣である「唐衣(からぎぬ)」および「裳(も)」に注目し, 被服構成学の側面からその特徴について検討した.

2. 女子装束 —唐衣・裳—

女子装束(唐衣裳)の構成は, 髪上げの具, 唐衣, 表着, 打衣, 五衣, 単, 長袴, 裳, 襪(しとうず), 帖紙, 檜扇などから成立する(図1).



図1. 唐衣裳(女房装束)

1) 唐衣(からぎぬ)

女房装束(唐衣裳装束)の最上衣であり, 奈良時代の「背子」が変化したものである. 幅の狭い袖を付けた上半衣で襟を返して着装する. 藤原・鎌倉時代には, 肩を出して着用するような着装方法も見られるが江戸時代になると肩まで覆い包むように着用する.

構成は図2に示すように, 衿(おくみ)布のない垂領(たりくび)仕立てで, 襟を折り返して裏地を見せ, 首の後ろで襟を三角形に折り返した部分「髪置(かみおき)」が特徴である.

着装は, 現代では襟のラインを垂直に平行に威儀正しく整えて着装する(図1).

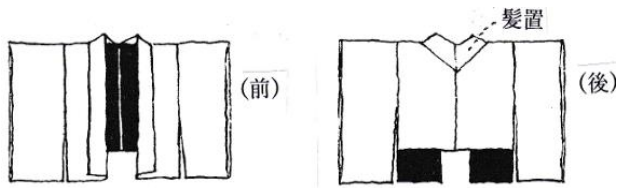


図2. 唐衣

2) 裳 (も)

飛鳥時代以降、女性は裾を引きずるほどの長さの長いスカートのような「裙 (うわも)」をまとっていた。しかし、だんだんと歩行に便利な後方の腰より下だけを覆う装飾的な「裳」に変化した。近世以降は、裳で唐衣を覆い被せるように着装するように変化した。

現在は、図3のように八枚の裾布をつなぎ合わせて構成される裳であるが、裾たけが長大であるだけでなく、総裾幅が2メートル以上にも及ぶ大形の衣裳である。

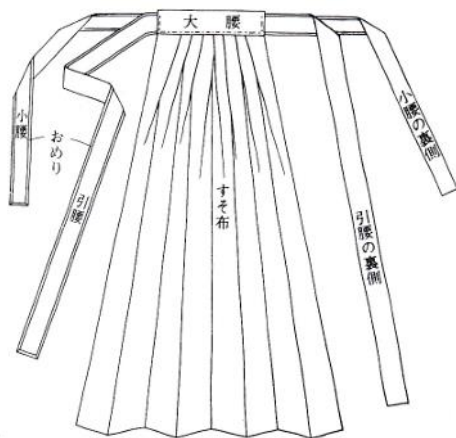


図3. 裳 (も)

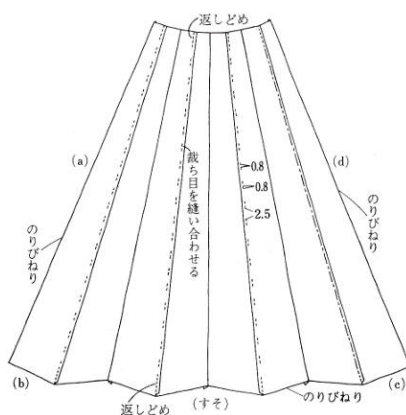


図4. 各裾布八枚の縫い合わせ

現在は、図4のように八枚の布を接ぎ合わせて縫製されるが、裁断された各布の端は裁ち目のまま、中表に合わせて、布を皺にしないように『二目落とし』の縫い方で裾から縫い上げる。

このように、裳は簡単な平面構成ではあるが、アコーディオンプリーツ式の縫製で形態保持や立体感を増すなどの工夫が各部に施され、単に裾を長く引くだけでなく、嵩 (かさ) を出すことにより、装束としての格を高く華麗なものにするなど、王朝衣裳としての感覚の鋭さが伺える。

3. まとめと今後の課題

前報に続いて本報では、女子装束、特に最上衣である唐衣および裳について、被服学および被服構成学の立場からまとめた。装束類 (束帯と十二単) の研究として一つのまとまりある有益な伝統文化資料とすることが、少なからずともできたと考えている。そして、本学の貴重な装束資料として、今後はアーカイブ化するとともに教育研究に役立てられると考える。他大学の博物館等や美術館等を調査した結果、装束を有する大学はいくつかあるが、何れも文学、材料学、色彩学的側面からのみの単一的な検討であり、人間が着用するという多面的、複合的見地から捉えようとする研究は見当たらない。このようなことから、被服学を専門とする本学にとっても貴重な伝統文化の資料になると考えている。

4. この助成による講演等

- [1] 第18回きもの文化検定合格セミナー「装束 (招待講演)」, 2023.8, 昭和女子大学
- [2] 第18回きもの文化検定合格セミナー「装束 (招待講演)」, 2023.9, 京都経済センター

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(K2303)の助成を受けたものである。

引用文献

- 1) 八束清貫. 装束の知識と着法. 文信社. 1962, p.128-133.
- 2) 服飾史図絵編集委員会. 服飾史図絵. 駸々堂. 1969, p.269-275.